

‘染井吉野’に広がる異常なコブ症状に注意しましょう。

1. 異常なコブ症状について

皆さんがお花見を楽しんでいる‘染井吉野’の枝に下記の写真の様なコブ症状は発生していませんか。このコブ症状が数年前より日本各地の‘染井吉野’に蔓延してきています。現在、研究機関による調査・研究が進められていますが、原因が明らかになっておらず、植栽環境や近年の異常気象との関連も疑われています。症状としては枝の一部に生じた小さなコブが徐々に肥大して行きます。このコブが大きくなるとその先の枝が枯れてしまいます。また、枝の各所に同様のコブ症状が広がることから伝染性がある可能性が非常に高いと推測されます。現在、日本各地でこの症状により樹勢が衰退している‘染井吉野’を見かける機会が増加しています。伝染性が疑われるため、被害拡大を防ぐためにはコブ状になった部分を切り取るしか対策方法がありません。感染の拡大を防止するためには早期防除が有効なので、このような症状を発見した場合には管理する自治体や団体などに連絡して対策をとるよう呼びかけましょう。



2. コブ症状が発生している‘染井吉野’の処置方法

現在、この症状の原因が明らかになっていないためコブ症状が発生している枝を発見したら、出来るだけ早期に切除するしか有効な対策はありません。桜は春から秋にかけての成育期に剪定すると剪定した部分から腐朽しやすいため、落葉期間中(12月～2月)に剪定し、剪定した箇所は傷口を保護するため傷口保護剤を塗布します。また、切除した枝は伝染経路が不明なため現時点では焼却処分することが望まれます。‘染井吉野’は萌芽性が強いので、剪定後の管理を充実することにより樹形の再生や樹勢回復を図ることができます。方法としては、つぼ穴方式や打ち込み式肥料などによる施肥が有効です。

オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）に「サクラ類こぶ病」が蔓延しています。

北海道の気候に適するため、道内に広く植えられているオオヤマザクラ（別名エゾヤマザクラ）で、近年、サクラ類こぶ病という病気に罹っている桜が増加しています。また、病気に罹ったまま放置されている桜が伝染源となって被害が拡大しています。桜の名所を守り育ててゆくため、蔓延してきているサクラ類こぶ病を防除して行きましょう。

1. サクラ類こぶ病の特徴

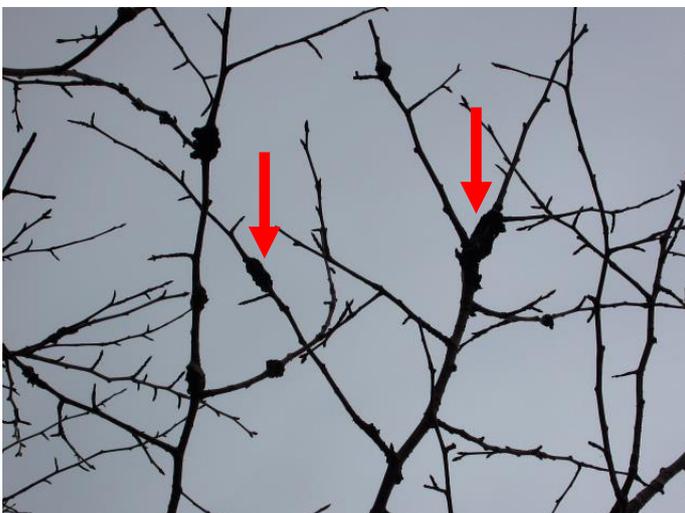
サクラ類こぶ病は細菌の一種（*Pseudomonas* sp.）が病原でおこる伝染病です。この病気は枝や幹に「こぶ状の組織」が形成され、病状が進行すると樹全体にこぶ状組織が増殖します。被害が広がると枝や幹にこぶ状の組織が目につくため花時の見映えが非常に悪くなります。また、こぶ状の組織やこの病気により枯れた部分から太い枝や幹に腐朽が進み、やがて桜は衰弱して枯れてしまいます。サクラ類こぶ病に罹った桜をそのまま放置しておくと病原菌の密度が高まるため、樹全体に被害が広がるとともに周辺の桜にも伝染してゆきます。このような桜を放置したまま近くに植栽すると苗木でも感染し、被害が拡大、蔓延します。

2. サクラ類こぶ病の防除対策

現在、最も効果的な防除方法は病気に罹った枝や幹を切除して伝染源を無くすことです。切除の時期は病気の枝が見分け易いこと、剪定の適期であることなどから落葉期が適しています。切り口には保護剤を塗布しましょう。見落としやその後の発病などがあるので、2～3年は継続して行う必要があります。なお、こぶ状の組織が多くなってからの対策は樹勢に影響するので、よく観察して早期に切除するようにしましょう。

3. 新規植栽に当たっての留意点

オオヤマザクラは大木となるので植栽間隔が狭いとすぐに成育環境が過密な状態となってしまいます。そうするとサクラ類こぶ病が発生しやすくなるので充分に間隔を空けて植えましょう。また、周辺にこの病気に罹っている桜があると感染しやすいので、防除対策をとりましょう。



サクラ類こぶ病に罹った枝。矢印で示したように病気に罹った部分には、こぶ状の組織がつくられます。